第7回 宇部市民オーケストラ

♪クラシックの♪午後

～気軽にオーケストラ～

指揮 十川 真弓
MAYUMI SOGAWA

2005年
9月4日(日)

■開場 13：00　■開演 14：00

宇部市渡辺翁記念会館

入場料
¥1,000
(高校生以下 ¥500)

プログラム

ウェーバー	**「魔弾の射手」序曲**
ドリーブ	**バレエ組曲「シルヴィア」**
	休　憩
ブリテン	**シンプルシンフォニー**
スメタナ	**交響詩「わが祖国」より 高い城・モルダウ**

歌劇「魔弾の射手」序曲　**カール・マリア・フォン・ウェーバー作曲**

この歌劇のあらすじであるが、わたしはこの歌劇を見たこともないので多少の独断と偏見が入っていることをあらかじめお断りしておく。「魔弾」とは、悪魔との契約によって造る事の出来る、「絶対に的を外さない弾丸」のことである。その代償は三年後に渡す、と約束する人間の魂だが、それまでに新たなる「魔弾の射手」を悪魔に紹介すればこれは免除される。「魔弾」は一度の鋳造で七発だけ手に入る。強力な魔力により自由自在に曲がり、銃口を何処に向けようとも必ず狙ったものに当る。唯一の例外は、悪魔が何らかの意思をもって「的」を変えた時だけである。主人公マックスはボヘミアの森の森林官で射撃の名人、上司の森林保護官クーノーに認められ、その娘アガーテと将来を誓い合う仲となっているナイスガイである。射撃大会で優勝すれば森林保護官になれるしアガーテとも結婚出来る。人生バラ色のはずが最近スランプになり落ち込んでいる。実はそれは同僚のカスパールがかけた魔法の呪いのせいなのだが、マックスにそんなことが分かるわけがない。射撃大会で優勝できなければ全てがパーになるマックス、カスパールから百発百中の弾丸を作る方法がある（つまり魔弾のこと）といわれ、悩んだあげく誘惑に負けて魔弾を作る決心をする。カスパールは悪魔に対し、マックスが魔弾の後継者であることを告げ、ついでにアガーテを殺してくれとまで頼むが、悪魔の返事は「最後の魔弾を使ったときに決める」とつれないお返事。射撃大会当日、魔弾の力でマックスは見事優勝。しかも魔弾は一発余っている。領主が「最後の一発で鳥を撃ってみよ」と命じる。優勝して調子に乗ったマックスは最後の一発を空に向ける。その一発は悪魔が言い残した「最後の弾丸」である。弾丸がぐいと曲がってアガーテに向かった！倒れ伏すアガーテ、うわあ！えらいこっちゃと駆け寄ると、彼女は気絶しているだけだった。ふと見るとその近くで、男が弾丸に当たって倒れ伏していた。それは魔弾のいけにえとなったカスパールであった。その後マックスは恐くなって、魔弾のことを領主に告白し、お叱りを受けた上、アガーテとの結婚は一年延期となった。こんなお話だったと思う…

さて、今回演奏する序曲であるがソナタ形式をとっている。そのほとんど全ての主題は歌劇の中からとられている。序奏部はホルンにより「森のテーマ」が出てきてボヘミアの森の雰囲気をあらわす。その後、魔弾を鋳る不穏な雰囲気をコントラバスのPizz、ティンパニで表し、魔弾を鋳った後の嵐を表す第1主題が出てくる。その後アガーテの純愛を示す第2主題を1stバイオリン、クラリネットで情感たっぷりに演奏される。その後主題の展開、再度コントラバスのPizzにより再現部が現れ、最後に勝利の歓喜で終わるといった10分程度の短いながらもボヘミアの森の中での精神的対立、善と悪の戦い、愛と憎しみ等てんこ盛りの内容の濃い序曲である。序曲の中でも最高傑作の1つと言われている。

バレエ組曲「シルヴィア」　**レオ・ドリーブ作曲**

ドリーブの曲で有名なのはバレエ音楽「コッペリア」ではないかと思いますが、このドリーブ、あまり知られていない作曲家なんですよね。簡単に紹介しておきます。

1836年生まれ、1891年没のフランスの作曲家。パリ音楽院で作曲とピアノ、オルガンを専攻。オペレッタを中心にしたオペラ作曲家として活躍。1867年に「コッペリア」の作曲をパリのオペラ座から作曲を委嘱されて1870年の初演で大成功。この一事が契機となってバレエ作曲家としての地位が確立。その成功の翌年に、今までやっていた教会のオルガニスト、オペラ座の第2合唱指揮者の仕事をやめて作曲に専念し出し、それらの作曲活動の功績が認められてか、1881年には母校のパリ音楽院作曲科の教授に就任して、晩年は結構いい暮らし振りだった。

簡単に書くとこんな感じです。「コッペリア」は、当時、低迷していたフランス・バレエ界の存亡をかけ、オペラ座から依頼された大仕事。3年もの時間を費やして初演を大成功させましが、初演後は普仏戦争による上演中止、主役バレリーナと振付師の死など不幸が続いたのですが、それを乗り越えて戦争後に再演、その成功が、

ドリーブの不動の評価をもたらしたといえます。「シルヴィア」はその後1876年6月14日、オペラ座で初演を迎え、大成功をおさめました。

正式題名「シルヴィアまたはディアヌのニンフ(Sylvia ou La Nymphe de Daine)」というこのバレエは、1500年代イタリア・ルネッサンス後期の詩人タッソーの田園劇「アミンダ」に基づくギリシア神話を題材にしたもの。狩猟の女神ディアヌに仕えるニンフ(妖精)シルヴィアは、人間との恋を認められていないのを、エロスによって羊飼いアミンタと相思相愛になり、最後は例外的に。二人は結ばれる、という恋物語です。

1. 前奏曲 ～ 狩の女神

モデラート・マエストーソの荘重な行進曲ではじまり、その後ホルンが静かなメロディを奏でる。このときの舞台は神聖な夜の森であり、音楽はいかにも神秘的な雰囲気をたたえる。経過句のあとティンパニの合図とともにディアヌのニンフたちが狩猟を讃える踊りの音楽がはじまる。

2. 間奏曲 ～ 緩やかなワルツ

ホルンの序奏のあと、モデラートのかわいらしいテーマがヴァイオリンに現れる。この間奏曲は狩でつかれたニンフたちが休憩をとる場面。そしてニンフの一人シルヴィアが月夜の中でなまめかしく踊りはじめる。

3. ピチカート

奴隷の売人に扮したエロスが、女奴隷に扮したシルビアにアミンタを誘惑する踊りを躍らせる。

4. バッカスの行列

第3幕最初の曲で、トランペットのファンファーレとともに村人が登場、収穫祭においてバッカスをたたえる場面での音楽。そして前奏曲のテーマにもどり、神をたたえる中、壮麗に曲を閉じる。

「シルヴィア」はロシアバレエの第一人者チャイコフスキーが絶賛し、以降、ドリーブに影響されたようです。「シルヴィア」が作曲されたこの年、彼はあの「白鳥の湖」を書き上げています。より劇と密接につながり、一貫した筋と力をもつ「白鳥の湖」は、最初は大不評だったものの、後にはバレエ音楽の最高傑作となり、その後も彼の影響下ストラヴィンスキー、プロコフィエフといった作曲家が傑作バレエを次々と発表します。

…結構、地味な存在のドリーブですが、大きな役割を果たしているようですね…

シンプル・シンフォニー　ベンジャミン・ブリテン作曲

シンプル・シンフォニーは、イギリスの作曲家ベンジャミン・ブリテン(1913－76)が２０才の頃に作曲した弦楽合奏曲です。この曲はブリテンが9才－12才という少年時代に作曲したピアノ曲や歌曲のメロディーをもとに作曲されました。

曲は以下の4つの楽章から構成されており、いずれも曲の題名どおり、シンプルで楽しく、美しい旋律に溢れています。

第一楽章:Boisterous Bourree(騒々しいブーレ)
第二楽章:Playful Pizzicato(おどけたピチカート)
第三楽章:Sentimental Saraband(感傷的なサラバンド)
第四楽章:Frolicsome Finale(陽気な終曲)

聴衆の皆さんに特に御注目戴きたいのはピチカートのみで演奏される第二楽章です。テンポが速いためこのピチカートはたいへん難しく、正確に演奏するのは至難の技と言われています。また最も聞きごたえがあるのは第三楽章です。この楽章に出てくるメロディは多くの弦楽合奏の名曲の中でも最も哀愁を帯びた「せつない」メロディーだと言われています。宇部オケ弦セクションの熱くせつない大人の情熱を御堪能下さい。

交響詩「わが祖国」より、「高い城」、「モルダウ」　スメタナ作曲

スメタナは1824年に生まれたチェコの国民音楽の祖と呼ばれる音楽家です。当時のチェコはハプスブルク家のオーストリア帝国の支配下にありましたが、次第に民族主義の動きが高まってきていました。音楽の面でそれを代表するのがこの連作交響詩「わが祖国」で、1874～79年にかけて全６曲が作曲され、その第１曲が「高い城」、第2曲が「モルダウ」です。チェコでは、第2次大戦後「プラハの春」という音楽祭が開催され、毎年スメタナの命日に当たる5月12日に「わが祖国」全6曲の演奏で開始されています。ところで「プラハの春」というと、1968年、同じ名前の下に進められた民主化運動に対し、当時のソビエト政権がこれを阻止するため8月に武力侵攻を実施、このとき国営放送が「モルダウ」を流し続けて抵抗の意思を示した歴史もまだそれほど遠い記憶ではありません。

第1曲「高い城(ビシェフラード)」は、チェコの首都プラハの南のモルダウ川東岸にある岩山に中世チェコ

のプシェミスル王朝の城が築かれており、その城がビシェフラードという名前でした。音楽は、伝説の吟遊詩人が奏でる竪琴の響きを示すハープのメロディで始まり、かつてのビシェフラードの戦いと勝利、そして栄光と没落の歴史が語られます。

第2曲「モルダウ」は、南ボヘミアに端を発しプラハの市内を流れる川の名前で、チェコ国民にとって心のよりどころとなっています。曲は木管楽器による小さなせせらぎが流れ出す様子から始まり、次第にゆったりとした川の流れに発展していきます。流れの途中では、角笛の響きが聞こえる「森の狩」の場面や、「村の婚礼」で田舎の人々の踊るポルカの音楽、夜になって月の光に照らされて水面に水の精たちが舞い踊る場面が表現されます。そして再び流れが速くなり波しぶきが飛び散る聖ヨハネの急流を過ぎると、モルダウ川はプラハの市内に流れ込みます。ここでは最初のメロディが短調から長調に変り、クライマックスで「高い城」のテーマが朗々と響き渡って曲を終わります。

宇部市民オーケストラ

役員

団長：佐藤育男　**副団長**：栗林宏明、末永俊彦、濱野妙子
音楽監督・指揮：十川真弓
コンサートミストレス&コンサートマスター：安永　恵、笹本真理子、内海俊彦
管セクションリーダー：向山尚志
インスペクター：上野明弘
マネージャー：向山尚志
ステージマネージャー：稲垣史郎　**楽器**：稲垣史郎、粟野直樹
楽譜：稲垣智子、大石正興、山本麻衣子
会計：末永俊彦、濱村典子、原田圭子、久井のり子
厚生：加藤由香理　**広報**：上野　尚

団員（◎印コンサートマスター　○印パートリーダー）

ヴァイオリン　◎安永　恵　◎笹本真理子　◎内海俊彦　○清水治子　秋山あづさ　在田和子　池田英子　池田芳江　上野　尚　内田久士　大森富久子　栗林左知　坂本直子　佐貫政彰　重藤美言　中村素子　永本晴美　中山仁美　縄竹俊子　久井のり子　松井顕子　吉永　準　Rebekah Raner

ヴィオラ　○濱野妙子　市本久子　稲垣智子　上野明弘　大石正興　小田浩代　国分秀基　大木容子　吉田　進　吉本宗明　石森桂子（客演）　飯田幸生（客演）

チェロ　○栗林宏明　明石奈津子　秋山友紀　在田康子　石井秀太郎　今井　健　大森　薫　加藤由香里　児玉佑司　佐伯真理子　中谷仁美　濱村和幸　原田圭子　原田典子　藤野　緑

コントラバス　○藤野　隆　河津隆雄　杉村浩信　弘中章司　堀亜由美　兼重美鈴

フルート　○小賀真理子　井伊秀子　品川知佐子　鈴木まさ子　高井寿永　田村知子

オーボエ　○宗國敦子　石村　愛　岡崎　兆　奈良知佳

クラリネット　○赤司純平　磯谷妙子　石川なつ来　稲垣史郎　大村真奈美　向山尚志

ファゴット　○小林太郎　福田敦宏　義永由奈　宮下英晃　村上曜子

トランペット　○種田裕彦　藤井晶宏　藤井淳子

ホルン　○徳永　輝　馬屋原由充　河津弥恵　斎藤美由紀　澤本貴裕　濱村典子　福田　誠　柳井秀雄

トロンボーン　○山本　忍　大村康一郎　山本麻衣子

チューバ　奥中淳夫（客演）

パーカッション　○貞国泰子　山元紀世子　粟野直樹　川手艶子（客演）　末永利一郎（客演）

ハープ　白濱由佳（客演）